

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	患者図書館訪問(1)東邦大学医療センター大森病院「からだのとしよしつ」のご案内
作成者(著者)	岡田, 光世
公開者	日本薬学図書館協議会
発行日	2018.09.01
ISSN	03862062
掲載情報	薬学図書館. 63(1). p.10 13.
資料種別	学術雑誌論文
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD23080635

患者図書館訪問 ①

東邦大学医療センター大森病院 「からだのとしょしつ」のご案内

岡田 光 世*

1. はじめに

病院内でおこなわれている患者向け図書サービスには、大きく分けると、入院生活を穏やかに過ごすための本を中心とした読書支援サービスと、患者や家族に医学情報を提供することを目的としたサービスがある。ここでは、医学情報を提供する施設を、患者図書室とよぶこととする。

患者図書室は、2000年以降、大きな病院を中心に増えつつある。その背景として、インフォームドコンセントに代表されるような、患者参加型医療の浸透が考えられる。医療従事者の間では、患者への情報提供が安全な医療には不可欠であるという考えが共有されている。また、患者側にも情報を正しく理解して病気の治療法を決定する権利が患者自身にあることが理解されつつある。しかし、医療従事者と患者が持っている情報の質や量には大きな差があり、情報の少ない状態で自己決定を求められて戸惑う患者も多く、情報入手のサポートの重要性を実感させられる。

本稿では、東邦大学医療センター大森病院「からだのとしょしつ」（以下、「としょしつ」）でのサービスや運営について紹介する。とくに「としょしつ」では、開室は無人でないこと、司書とボランティアが協力してサービスにあたっていることが特徴である。それについても触れることとする。

2. からだのとしょしつ概要

「としょしつ」のある、東邦大学医療センター大森病院（以下、大森病院）は、特定機能病院、救命救急センター（三次救急）、東京都指定二次救急医療機関、地域がん診療連携拠点病院などに指定されており、病床数948床を有し、東京城南地区医療の中核を担っている。

「としょしつ」（図1）は、2005年4月に開設された。施設の目的は、インフォームドコンセントを推進するために、患者に質の高い情報を提供すること、病院内に癒

しの場を提供することである。開設のきっかけは、東邦大学医学メディアセンター（以下、医学メディアセンター）からの提案だったが、当時すでに病院執行部が患者図書室の意義を理解していたため、病院長への設立趣意書の提出から約1年半、十分な準備期間を経て開設することができた。「としょしつ」の開設から初期の運営については押田¹⁾が、設備については児玉²⁾がすでに報告しているため、ここでは省略する。

医学情報提供のほかに、もう一つの運営目的である「癒しの場を提供すること」については、病院は医療施設であるが、患者や家族が心を鎮めて病気のことを考えられる場所が少ない。「としょしつ」では病気の知識を得るだけでなく、病気を受け入れ、治療に前向きになるための環境を併せて提供することも心がけている。

筆者は「としょしつ」の業務を2016年度より全面的に前任者から引き継ぎ、医学メディアセンター業務と兼務している。前任者は退任する際に次のようなことを話した。「患者に医療情報を提供することの意義を理解している病院は多いが、実際に患者図書室を設置している病院は多いとはいえず、そのようななかで「としょしつ」が10年以上、安定して運営されてきた理由は、企画から開設までの1年半に運営方針の決定、運営規則の作成などの準備が余裕をもってできたことと、開設後、運営委員会が十分に機能してきたことにある」。担当を引き継いだ現在、利用者サービスと同時に、運営委員会のコーディネーターも大きな役割であると感じている。

3. 利用者ニーズ

病院内の図書室のため、利用者はすでに病名がわかっている方、診断を確定するための検査を受けて結果待ちの方などが多く、質問は比較的明快である。おもな質問は次のとおりである。

- ・病気や薬について調べたい
- ・医師から受けた説明を、資料で確認したい
- ・医師との面談に備えて質問事項をまとめたい
- ・手術後や退院後の生活や食事のことを知りたい
- ・家族が患者にしてあげられることを知りたい

しかし、なかには混乱した状態で「としょしつ」を訪れる方もいるため、入り口で必ずスタッフから利用者に

* Teruyo OKADA
東邦大学医学メディアセンター
〒143-8540 東京都大田区大森西5-21-16
E-mail: teruyo@mnc.toho-u.ac.jp



図1 からだのとしょしつ室内

挨拶の言葉をかけるなど、質問しやすい雰囲気を作るよう努めている。また、希少疾患や資料が少ない疾患を調べたいと問い合わせをしてくる利用者もいるので、必要に応じて医学メディアセンターの資料を提供することもある。

利用者には、大森病院のスタッフもおり、患者への説明のためにパンフレットがほしい、知識の確認をしたい、自己研鑽したいなどの理由で利用する。その他、近隣の介護職の方が資料を探すために利用することもある。

4. 情報提供

利用者への情報提供で心がけているのは、利用者の自己決定をサポートするために医学的根拠のある情報を選択し提供することである。質問内容について話を聞くうちに、利用者が自己決定すべき事柄に意見を求められる場合もある。そのようなときは、司書は医療相談には応じられないことを伝えて、病院内の相談窓口や他部門を紹介している。

「としょしつ」では開設当初から医療情報提供の指針を掲げている。利用者に留意してほしい事項として、「としょしつ」利用案内のリーフレットに記載し、室内掲示板にも掲示している（図2）。この文書は、日本医学図書館協会の機関誌「医学図書館」に掲載されたスナイダー足立純子氏の論文³⁾をもとに作成した。

「からだのとしょしつ」の医療情報の提供について

- ・決して特定の治療法を薦めているわけではありません
- ・提供する資料は、ご質問に対して、ごく一部分の回答でしかありません
- ・提供する資料は、患者さんご自身の状態と適合しているとは限りません
- ・提供する資料は、患者さんが担当医師と、より具体的な話し合いを可能にする材料としてご利用ください

患者さんの個人情報について

- ・「からだのとしょしつ」で受けた質問や利用された情報について、主治医やご家族、その他の方に伝えることは決してありません



図2 「医療情報提供の指針」掲示

「としょしつ」の資料では足りない情報をインターネットで検索し、提供することもある。医療機関の診療実績の最新情報や、ある種のがんや難病に指定されている病気などは、研究機関による最新情報がインターネット上で公開されていることもある。インターネットの利点は専門家による学術情報を誰でも利用できる点にあるが、同時にさまざまな価値観を持つ人々が独自の視点で情報公開していることもあり、信頼できるウェブサイトを選ぶことが重要となってくる。「としょしつ」ではインターネット上の情報源の評価については、日本インターネット医療協会（JIMA）の「インターネット上の医療情報の利用の手引き」⁴⁾を参考にしてしている。

5. 運営

「としょしつ」の運営は、大森病院と医学メディアセンターの連携によりおこなわれている。運営委員は、病院長を委員長として、医師、看護師、ソーシャルワーカー、薬剤師、検査技師、栄養士、医事課、総務課、司書により組織されている。運営委員会は年4回開催され、この会議をコーディネートするのが司書の大きな役目である。毎回おこなう活動報告は過去3カ月間の利用状況と、司書が受けた質問とその対応である。質問の内容は、時には病院サービスの見直しに通じることもあるため必ずフィードバックするようにしている。対応については、司書の判断の妥当性について委員に意見を求めたり、別の対応はないかアドバイスをもらったりしている。その他、運営に関することや、資料の選書と除架について審議する。資料は司書が選書したものを最終的に運営委員会で内容を確認し、承認を得る。除架する資料についても同様の判断をしている。

運営予算は、大森病院予算から支給され、おもに資料購入、消耗品などに充てられる。人件費については、医学メディアセンター予算から支給される。

スタッフは、医学メディアセンターから司書が、大森

病院のボランティアコーディネーター委員会からボランティアが配置されており、常時、スタッフがいる体制を保っている。

6. スタッフ

「としょしつ」は司書とボランティアの2名体制で利用者サービスをおこなっている。司書は、筆者のほか臨時職員が1名おり、交代で担当している。ボランティアは、現在10名の方が活動してくれている。みなさん人生経験豊富なシニア世代が中心で、元司書の方もいて心強いパートナーである。活動時間は、午前・午後の半日ずつを担当し、なかには外来案内、囲碁・将棋、なのはな文庫（後述）のボランティア活動とかけもちしている方もいる。「としょしつ」でのおもな活動内容は、利用者対応、室内環境の整備、書架の整理などだが、各自で自発的に利用者サービスをおこなっている。例えば、医療関連の新聞記事の切り抜きをする方、その記事を整理しファイリングや掲示する方、子ども向けに動物などの折り紙を折る方（図3）や、紙芝居をする方などがある。利用者のなかには、小さい子ども連れの方も多く、診療までの待ち時間に折り紙で遊んだり、紙芝居を楽しむなど、とても好評を得ている。

司書とボランティアは病院内で、白衣を着ていないスタッフとして患者からは声をかけやすい存在のようである。利用者のなかには、医師や看護師には話を聞きづらいという方もいて、調べものをするのに「としょしつ」を訪れた際にお話しされる方もいる。話すことで考えがまとまり、気持ちが落ち着かれる利用者も見受けられる。傾聴も大切な役割の一つである。

無人で運営している患者図書室もあるが、不安な気持ちで利用する方も少なくないため、スタッフが常駐することは、普段は利用者を見守り、必要があれば質問にお答えすることで、利用者に安心感を持ってもらえるという大きな利点がある。

7. 広報活動

2015年5月、大森病院の耐震工事と院内改修工事に



図3 ボランティアさんの折り紙

伴い、同じフロア内で部屋を移転した。移転先は廊下の奥に位置し、利用者からは少々わかりにくい場所になったこともあり、移転前と比較すると利用者数がわずかに減少した。運営委員会で議題として取り上げるなどして、委員からの意見をもらい、利用促進のための広報活動に力を入れることとなった。

具体的には、2016年11月より、院内の総合受付や各診療科の外来受付などに「としょしつ」の利用案内を設置した。利用案内を月1回程度、ボランティアが各所を巡回し補充している。1回に30~50部を補充しており、患者の関心は高いものと考えられる。

「としょしつ」の外での活動としては、大森病院公開講座での広報がある。講座開始の30分前より「としょしつ」の案内と講座テーマに関する資料を紹介するスライドを繰り返し上映している。また、会場の外では関連資料の展示（図4）とブックリストの配布をしている。関心の高いテーマの講座では、資料を熱心にご覧になる方や、ブックリストを持ち帰られる方も多い。

8. 便利な道具の情報展

利用者のなかには、退院後や治療中の生活に不安を感じている方が多い。そのような方に、安心して日常生活を送ることができるような生活補助具を紹介する展示会を定期的に開催している⁵⁾。

この企画は、東邦大学看護学部高齢者看護研究室との共同企画として始まった。実際に展示品を手にとってもらい、便利でデザインに優れた道具があることを知ってもらうことが目的である。デザインの優れた道具は積極的な療養生活を促すと考え、デザインも重視して展示品を選ぶようにしている。販売はしないが、入手のための情報は提供している。

現在は「としょしつ」独自で、ボランティアの方にもアイデアを出してもらいながら企画し、近隣の介護事業所の協力のもと開催している。展示スペースの都合によ



図4 公開講座での資料展示



図5 「便利な道具の情報展」

り、小物を中心とした展示である (図5)。

「としょしつ」の次のステップとして「QOLの支援」を検討しているため、蔵書だけではなく、「モノ」での情報提供にも取り組んでいきたい。

9. なのはな文庫

「なのはな文庫」(以下、「文庫」)は「としょしつ」のボランティア活動の一環として、2009年8月から活動を開始した⁶⁾。立ち上げのきっかけは、「としょしつ」を利用される入院患者からの「医学書ではない、ふつうの本も読みたい」という声であった。「としょしつ」を開設した当初、いずれはこのような要望が出ることを予測していたため、当時のボランティアコーディネート委員会に相談したところ、病棟のデイルームに本棚があり、各病棟で管理していること、外来案内ボランティアのなかに、「入院患者さんに読書を楽しんでもらうための活動をしたい」と考える方がいることを知り、「としょしつ」で活動中の方にも参加してもらい、活動を開始することとなった。

患者のアメニティ向上を目的に、病棟デイルームと外来の待合エリアなど院内16カ所を毎週1回巡回して、本棚の本の入れ替えと整頓をする活動をしている。「文庫」の本はすべて寄贈本である。職員からの寄贈をはじめ、入院中に「文庫」を利用していた患者が退院後に寄

贈してくださることも多い。また、近隣の公共図書館からリサイクル図書の寄贈を受けている。公共図書館との連携事業の一つと捉えており、「としょしつ」が連絡窓口を担当している。

10. 今後の課題

現在、近隣の公共図書館5館と連携しているが、今後はより一層の公共図書館との連携拡大を検討している。近年は公共図書館でも医療・健康情報サービスを重視する図書館が増えてきており、近隣の公共図書館のなかには充実した専用コーナーが設置されている館もある。また、医療・健康情報サービスの開始を検討する公共図書館が「としょしつ」を見学に来られるケースが増えている。地域住民に医療情報を提供するために、公共図書館との連携を通じて、これまでの「としょしつ」の経験をどのように活かせるのかを考えていきたい。

現在、東邦大学医療センター大橋病院(以下、大橋病院)が新病院を建築中で、病院オープンと同時に患者図書室の開設を予定している。所在地の目黒区と大橋病院が連携協定を結んでいることから、目黒区立図書館との連携事業を検討中である。より良い相互協力を目指したい。

参考文献

- 1) 押田いく子. 「からだのとしょしつ」を開設して、全国患者図書サービス連絡会会報. 12 (3), 2005, 62-67.
- 2) 児玉 関. 患者への医学情報の提供—東邦大学医療センター大森病院「からだのとしょしつ」を事例に—, 病院設備. 58 (2), 2016, 64-67.
- 3) スナイダー足立純子. Englewood Hospital and Medical Center Library における患者への情報提供サービス: Information therapy. 医学図書館. 42 (2), 1995, 138-144.
- 4) 特定非営利活動法人日本インターネット医療協議会. (オンライン), 入手先 (<<http://www.jima.or.jp/userguide1.html>>), (参照 2017-10-24).
- 5) 「便利な道具の情報展」. 東邦大学医療センター大森病院からだのとしょしつ. (オンライン), 入手先 (<<http://www.mnc.toho-u.ac.jp/mmc/karada/tools.php>>), (参照 2017-10-24).
- 6) 「なのはな文庫」. 東邦大学医療センター大森病院からだのとしょしつ. (オンライン), 入手先 (<<http://www.mnc.toho-u.ac.jp/mmc/karada/nanohana.php>>), (参照 2017-10-24).

(原稿受付: 2017.11.8)